

## 農薬評価書

# イソキサフルトール

2010年6月

食品安全委員会

## 目次

	頁
○ 審議の経緯 .....	4
○ 食品安全委員会委員名簿 .....	4
○ 食品安全委員会農薬専門調査会専門委員名簿 .....	4
○ 要約 .....	7
I. 評価対象農薬の概要 .....	8
1. 用途 .....	8
2. 有効成分の一般名 .....	8
3. 化学名 .....	8
4. 分子式 .....	8
5. 分子量 .....	8
6. 構造式 .....	8
7. 開発の経緯 .....	8
II. 安全性に係る試験の概要 .....	9
1. 動物体内運命試験 .....	9
(1) ラット .....	9
(2) ヤギ .....	10
(3) ニワトリ① .....	11
(4) ニワトリ② .....	12
(5) ウシ .....	12
2. 植物体内運命試験 .....	12
(1) とうもろこし .....	12
(2) さとうきび .....	13
(3) 小麦 .....	13
3. 土壌中運命試験 .....	14
(1) 好氣的土壌中運命試験 .....	14
(2) 好氣的湛水土壌中運命試験 .....	14
(3) 嫌氣的湛水土壌中運命試験 .....	15
(4) 土壌中光分解試験 .....	16
(5) 土壌吸脱着試験 .....	16
(6) 土壌溶脱性試験 .....	16
4. 水中運命試験 .....	17
(1) 加水分解試験 .....	17
(2) 水中光分解試験 .....	17
5. 土壌残留試験 .....	17

6. 作物残留試験	18
7. 後作物残留試験	18
8. 一般薬理試験	18
9. 急性毒性試験	18
(1) 急性毒性試験 (原体)	18
(2) 急性毒性試験 (代謝物)	19
(3) 急性神経毒性試験 (ラット)	19
10. 眼・皮膚に対する刺激性及び皮膚感作性試験	19
11. 亜急性毒性試験	20
(1) 90日間亜急性毒性試験 (ラット)	20
(2) 90日間亜急性毒性試験 (マウス)	21
(3) 90日間亜急性神経毒性試験 (ラット)	21
(4) 42日間亜急性毒性試験 (ラット)	21
(5) 28日間亜急性毒性試験 (マウス)	22
(6) 21日間亜急性経皮毒性試験 (ラット)	23
(7) 28日間亜急性毒性試験 (代謝物C、ラット)	23
12. 慢性毒性試験及び発がん性試験	23
(1) 1年間慢性毒性試験 (イヌ)	23
(2) 2年間慢性毒性/発がん性併合試験 (ラット)	24
(3) 18カ月間発がん性試験 (マウス)	26
13. 生殖発生毒性試験	27
(1) 2世代繁殖試験 (ラット)	27
(2) 発生毒性試験 (ラット)	27
(3) 発生毒性試験 (ウサギ)	28
14. 遺伝毒性試験	28
15. その他の試験	29
(1) イソキサフルトール投与後のチロシン代謝種間比較試験	29
(2) 血中チロシン濃度と眼毒性の動物種差	30
(3) イソキサフルトール及び代謝物の4-HPPD活性に対する影響	30
(4) イソキサフルトール及びNTBCを用いたチロシン負荷試験	31
(5) 血漿チロシン濃度に対する影響 (ラット)	31
(6) 血漿チロシン濃度に対する影響 (マウス)	31
(8) 肝薬物代謝酵素に対する影響 (ラット)	32
(9) 肝薬物代謝酵素に対する影響 (マウス)	33
(10) 甲状腺に対する影響 (ラット)	33
III. 食品健康影響評価	35

・別紙1：代謝物/分解物略称.....	41
・別紙2：検査値等略称.....	42
・参照.....	44

### <審議の経緯>

- 2005年 11月 29日 残留農薬基準告示 (参照 1)  
2007年 4月 9日 厚生労働大臣より残留基準設定に係る食品健康影響評価について要請 (厚生労働省発食安第 0409005 号)  
2007年 4月 10日 関係書類の接受 (参照 2~8)  
2007年 4月 12日 第 186 回食品安全委員会 (要請事項説明)  
2009年 7月 15日 第 25 回農薬専門調査会確認評価第一部会  
2009年 11月 13日 第 57 回農薬専門調査会幹事会  
2010年 1月 21日 第 317 回食品安全委員会 (報告)  
2010年 2月 12日 第 60 回農薬専門調査会幹事会  
2010年 2月 25日 第 321 回食品安全委員会 (報告)  
2010年 2月 25日 から 3月 26 日まで 国民からの御意見・情報の募集  
2010年 6月 18日 農薬専門調査会座長より食品安全委員会委員長へ報告  
2010年 6月 24日 第 337 回食品安全委員会 (報告)  
(同日付け厚生労働大臣へ通知)

### <食品安全委員会委員名簿>

(2009年 6月 30 日まで)

見上 彪 (委員長)  
小泉直子 (委員長代理)  
長尾 拓  
野村一正  
畑江敬子  
廣瀬雅雄  
本間清一

(2009年 7月 1 日から)

小泉直子 (委員長)  
見上 彪 (委員長代理\*)  
長尾 拓  
野村一正  
畑江敬子  
廣瀬雅雄  
村田容常

\* : 2009年 7月 9 日から

### <食品安全委員会農薬専門調査会専門委員名簿>

(2008年 3月 31 日まで)

鈴木勝士 (座長)	佐々木有	根岸友恵
林 真 (座長代理)	代田真理子***	平塚 明
赤池昭紀	高木篤也	藤本成明
石井康雄	玉井郁巳	細川正清
泉 啓介	田村廣人	松本清司
上路雅子	津田修治	柳井徳磨
白井健二	津田洋幸	山崎浩史
江馬 眞	出川雅邦	山手丈至

大澤貫寿  
太田敏博  
大谷 浩  
小澤正吾  
小林裕子  
三枝順三

長尾哲二  
中澤憲一  
納屋聖人  
成瀬一郎\*\*  
西川秋佳\*  
布柴達男

與語靖洋  
吉田 緑  
若栗 忍

\*: 2007年4月25日から

\*\* : 2007年6月30日まで

\*\*\* : 2007年7月1日から

(2010年3月31日まで)

鈴木勝士 (座長)  
林 真 (座長代理)  
相磯成敏  
赤池昭紀  
石井康雄  
泉 啓介  
今井田克己  
上路雅子  
白井健二  
太田敏博  
大谷 浩  
小澤正吾  
川合是彰  
小林裕子  
三枝順三\*\*\*

佐々木有  
代田真理子  
高木篤也  
玉井郁巳  
田村廣人  
津田修治  
津田洋幸  
長尾哲二  
中澤憲一\*  
永田 清  
納屋聖人  
西川秋佳  
布柴達男  
根岸友恵  
根本信雄

平塚 明  
藤本成明  
細川正清  
堀本政夫  
松本清司  
本間正充  
柳井徳磨  
山崎浩史  
山手丈至  
與語靖洋  
義澤克彦\*\*  
吉田 緑  
若栗 忍

\*: 2009年1月19日まで

\*\* : 2009年4月10日から

\*\*\* : 2009年4月28日から

(2010年4月1日から)

納屋聖人 (座長)  
林 真 (座長代理)  
相磯成敏  
赤池昭紀  
石井康雄  
泉 啓介  
上路雅子  
白井健二  
太田敏博  
小澤正吾  
川合是彰  
川口博明

代田真理子  
高木篤也  
玉井郁巳  
田村廣人  
津田修治  
津田洋幸  
長尾哲二  
永田 清  
長野嘉介  
西川秋佳  
布柴達男  
根岸友恵

福井義浩  
藤本成明  
細川正清  
堀本政夫  
本間正充  
松本清司  
柳井徳磨  
山崎浩史  
山手丈至  
與語靖洋  
義澤克彦  
吉田 緑

小林裕子  
三枝順三  
佐々木有

根本信雄  
八田稔久  
平塚 明

若栗 忍

## 要 約

イソキサゾール系除草剤であるイソキサフルトール (CAS No. 141112-29-0) について、各種資料 (米国、豪州等) を用いて食品健康影響評価を実施した。

評価に供した試験成績は、動物体内運命 (ラット、ヤギ、ニワトリ及びウシ)、植物体内運命 (とうもろこし、さとうきび及び小麦)、後作物残留、急性毒性 (ラット及びウサギ)、亜急性毒性 (ラット及びマウス)、慢性毒性 (イヌ)、慢性毒性/発がん性併合 (ラット)、発がん性 (マウス)、2 世代繁殖 (ラット)、発生毒性 (ラット及びウサギ)、遺伝毒性試験等である。

試験結果から、イソキサフルトール投与による影響は、主に肝臓 (肝細胞肥大等) 及び眼 (角膜混濁等) に認められた。繁殖能に対する影響、催奇形性及び遺伝毒性は認められなかった。

発がん性試験において、ラット及びマウスの雌雄で肝細胞腫瘍、ラットの雄で甲状腺腺腫の発生頻度の増加が認められたが、発生機序は遺伝毒性メカニズムとは考え難く、評価にあたり閾値を設定することは可能であると考えられた。

食品安全委員会は、ラットを用いた 2 年間慢性毒性/発がん性併合試験の無毒性量 0.5 mg/kg 体重/日を根拠として、安全係数 100 で除した 0.005 mg/kg 体重/日を一日摂取許容量 (ADI) と設定した。



## I. 評価対象農薬の概要

### 1. 用途

除草剤

### 2. 有効成分の一般名

和名：イソキサフルトール

英名：isoxaflutole (ISO 名)

### 3. 化学名

#### IUPAC

和名：5-シクロプロピル-4-(2-メチルスルフォニル-4-トリフルオロメチルベンゾイル)イソキサゾール

英名：5-cyclopropyl-4-(2-methylsulfonyl-4-trifluoromethylbenzoyl)isoxazole

#### CAS (No. 141112-29-0)

和名：5-シクロプロピル-4-イソキサゾリル[2-(メチルスルフォニル)-4-(トリフルオロメチル)フェニル]メタノン

英名：5-cyclopropyl-4-isoxazolyl[2-(methylsulfonyl)-4-(trifluoromethyl)phenyl]methanone

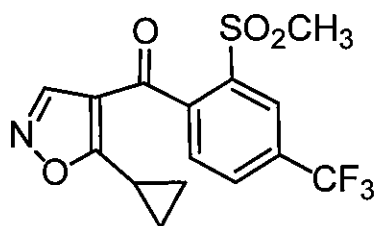
### 4. 分子式

$C_{15}H_{12}F_3NO_4S$

### 5. 分子量

359.53

### 6. 構造式



### 7. 開発の経緯

イソキサフルトールは、イソキサゾール構造を持つ除草剤である。作用機構は、プラストキノン生合成経路に関与する 4-HPPD の阻害である。海外では米国、豪州等において登録されている。

国内での登録はなく、ポジティブリスト制度導入に伴う暫定基準値が設定されている。

## II. 安全性に係る試験の概要

米国資料（1998年）、豪州資料（1997及び2001年）及びカナダ資料（2001年）を基に、毒性に関する主な科学的知見を整理した。（参照2～7）

各種運命試験[II.1～4]は、イソキサフルトールのフェニル基の炭素を均一に<sup>14</sup>Cで標識したもの（以下「<sup>14</sup>C-イソキサフルトール」という。）を用いて実施された。放射能濃度及び代謝物濃度は特に断りがない場合はイソキサフルトールに換算した。代謝物/分解物略称及び検査値等略称は別紙1及び2に示されている。

### 1. 動物体内運命試験

#### (1) ラット

SDラット（一群雌雄各5匹）に<sup>14</sup>C-イソキサフルトールを1 mg/kg体重（以下[1.(1)]において「低用量」という。）若しくは100 mg/kg体重（以下[1.(1)]において「高用量」という。）で単回経口投与し、又は低用量で反復経口投与（14日間非標識体を投与後、15日目に<sup>14</sup>C-イソキサフルトールを単回経口投与）して、動物体内運命試験が実施された。（参照4、5、7）

#### ① 吸収

##### a. 血中濃度推移

低用量及び高用量単回投与群の血中濃度推移は表1に示されている。投与量、性別にかかわらず、 $T_{1/2}$ は59.2～61.1時間と比較的長かった。雌では雄に比べ $C_{max}$ に達するまでの時間が短かった。（参照4、5）

表1 血中放射能濃度推移

投与量	1 mg/kg 体重		100 mg/kg 体重	
	雄	雌	雄	雌
$T_{max}$ (時間)	1.03	0.52	0.98	0.67
$C_{max}$ (µg/g)	0.50	0.27	48.1	25.2
$T_{1/2}$ (時間)	61.1	59.5	59.2	60.0

##### b. 吸収率

排泄試験[1.(1)④]より得られた、尿、ケージ洗浄液及び組織中の放射能の合計より算出された吸収率は、低用量単回投与群、高用量単回投与群及び低用量反復投与群でそれぞれ73、39及び75%と推定された。（参照7）

#### ② 分布

各投与群で、標識体投与7日後の組織中に存在した放射能は、1.48～4.33% TAR

であった。各組織における残留値は、低用量単回投与群及び反復投与群では肝臓 (0.172~0.498 µg/g) 及び腎臓 (0.213~0.498 µg/g) で高かった。高用量単回投与群では、雌雄とも最も放射能濃度が高かったのは全血及び血漿であり、次いで、雄では肝臓及び腎臓、雌では肝臓、腎臓、肺及び心臓で高い値であった。(参照 3~5、7)

### ③ 代謝物同定・定量

低用量単回投与群及び反復投与群では、尿中に親化合物は検出されず、高用量単回投与群では、ごく微量検出された。尿中代謝物は、低用量単回投与群、反復投与群及び高用量単回投与群でそれぞれ 2、3 及び 9 種類確認された。主要代謝物は B (RPA202248) であり、70% TAR 以上存在した。

糞中には、高用量群でのみ親化合物が検出され、糞中化合物全体の 5~8% を占めた。これは、投与量によって尿及び糞中の排泄比率が異なることが原因と考えられ、また、高用量群でイソキサフルトールの吸収が飽和していることを示唆すると考えられた。

糞中代謝物は、低用量単回投与群及び反復投与群では B 及び C (RPA203328) の 2 種類、高用量単回投与群では主要代謝物 B 及び C を含め 11 種類確認された。

肝臓では、代謝物 C のみが検出された。

ラットにおける主要代謝経路は、最初に B が生成され、さらに C へと代謝されるものと考えられた。また、少量代謝物として、D (RPA205834)、E (RPA207048) 及び F (RPA205568) の生成が確認された。(参照 3~5、7)

### ④ 排泄

低用量単回投与群及び反復投与群では、尿中排泄は総排泄放射能の 60~67%、糞中排泄は 24~27% であった。高用量単回投与群では、投与後 7 日に排泄された放射能の 30~40% は尿中、55~60% は糞中であった。したがって主要排泄経路は低用量群では尿中、高用量群では糞中であった。しかしながら、高用量群では糞中に親化合物が認められたため、吸収が飽和したことにより糞中の放射能が高くなった可能性も考えられた。

放射能の大部分は、低用量単回投与群及び反復投与群では投与後 24 時間以内、高用量単回投与群では投与後 48 時間以内に排泄された。(参照 3~5、7)

## (2) ヤギ

泌乳期ザーネン種ヤギ (一群 1~2 匹) に、<sup>14</sup>C-イソキサフルトールを 7 日間強制経口 (1、10 及び 50 ppm 混餌相当量、1 日 2 回) 投与する動物体内運命試験が実施された。

初回投与後 24 時間で、25~40% TAR が尿及び糞中に排泄された。初回投与後 7 日間では、1、10 及び 50 ppm 投与群で糞中にそれぞれ 31、27 及び 29% TAR、尿

中にそれぞれ 54、40 及び 27% TAR 排泄された。

乳汁中には、1 ppm 投与群では放射能は検出されなかった。10 ppm 投与群では、最大で 0.06~0.10 µg/g、定常状態に達した時点で 0.05~0.08 µg/g の放射能が検出され、50 ppm 投与群では、最大で 0.35 µg/g、定常状態に達した時点で 0.34 µg/g の放射能が検出された。乳汁中は TAR に対し、0.5~0.6%であった。

組織中で最も残留放射能濃度が高かったのは、腎臓及び肝臓であった。残留放射能濃度は、1、10 及び 50 ppm 投与群で、肝臓ではそれぞれ 0.54、2.2 及び 3.9 µg/g、腎臓ではそれぞれ 0.16、0.94 及び 2.1 µg/g、骨格筋ではそれぞれ 0.04、0.27 及び 0.93 µg/g、腹腔内脂肪ではそれぞれ 0.01、0.08 及び 0.24 µg/g であった。

尿、糞、乳汁及び組織中に親化合物は検出されなかった。各試料中の代謝物の TRR に対する割合は表 2 に示されている。(参照 5、7)

表 2 ヤギ試料中代謝物 (%TRR)

	代謝物 B	代謝物 C	代謝物 E	未同定物質
尿	82.3	0.35	9.5	6.9
糞	65.0	3.7	20.3	9.9
肝臓	85.5	—	12.4	—
腎臓	82.0	—	11.6	5.6
筋肉	41.5	—	12.6	22.1
腎周囲脂肪	24.6	14.5	18.9	34.8
腹腔脂肪	24.2	8.1	25.8	40.3
乳汁	41.7	18.3	15.0	20.0

注) — : データなし

### (3) ニワトリ①

産卵期ワーレン種ニワトリ (投与群一群 5 羽、対照群 1 羽) に、<sup>14</sup>C-イソキサフルトールを 14 日間カプセル経口 (1 及び 10 ppm 混餌相当量) 投与する動物体内運命試験が実施された。

初回投与後 24 時間に、1 及び 10 ppm 投与群でそれぞれ 82 及び 70% TAR が排泄された。最終投与後 24 時間に排泄された放射能は、92~100% TAR であり、ほとんどが排泄物中に排泄された。

卵白中には、1 ppm 投与群では放射能は検出されず、10 ppm 投与群で 0.01 µg/g 検出された。卵黄中には、1 及び 10 ppm 投与群でそれぞれ 0.22 及び 0.14 µg/g の放射能が存在した。卵中の放射能は TAR に対し、0.15%未満であった。

組織中で最も放射能残留濃度が高かったのは、腎臓及び肝臓であった。残留放射能濃度は、1 及び 10 ppm 投与群で、肝臓ではそれぞれ 0.84 及び 0.95 µg/g、腎臓ではそれぞれ 0.06 及び 0.16 µg/g、筋肉ではそれぞれ定量限界未満及び 0.035 µg/g、脂肪ではそれぞれ 0.004 及び 0.24 µg/g、皮膚ではそれぞれ 0.008 及び 0.068 µg/g

であった。

各組織及び卵中に親化合物は検出されなかった。いずれの組織及び卵中でも代謝物 B が検出されたが、存在量は 6%TRR (筋肉) から 95%TRR 以上 (肝臓) と、組織によって差が認められた。また、代謝物 C、D 及び E が検出された。

ヤギ及びニワトリにおけるイソキサフルトールの主要代謝経路は、ラットにおける主要代謝経路と同じと考えられた。(参照 5~7)

#### (4) ニワトリ②

産卵期ニワトリ (品種及び羽数不明) に、<sup>14</sup>C-イソキサフルトールを 42 日間混餌 (0.18、0.54 及び 1.8 ppm) 投与する動物体内運命試験が実施された。

1.8 ppm 投与群で、肝臓、筋肉、皮膚 (脂肪を含む) 及び卵における親化合物及び代謝物 B の残留は 0.05 µg/g 未満であった。ただし、0.18 ppm 投与群の肝臓で B が 0.14 µg/g 検出された。(参照 7)

#### (5) ウシ

泌乳期ウシ (品種及び頭数不明) に、<sup>14</sup>C-イソキサフルトールを 42 日間混餌 (4.6、13.8 及び 46 ppm) 投与する動物体内運命試験が実施された。

46 ppm 投与群で、肝臓、腎臓、筋肉、脂肪及び乳汁における親化合物は 0.05 µg/g 未満であった。また、代謝物 B は筋肉及び脂肪では 0.05 µg/g 未満、乳汁中では 0.02 µg/g 未満であった。しかし、4.6 ppm 投与群において、代謝物 B は肝臓で 0.62 µg/g、腎臓で 0.14 µg/g 認められた。(参照 7)

## 2. 植物体内運命試験

### (1) とうもろこし

<sup>14</sup>C-イソキサフルトールをとうもろこし (品種: Pioneer brand 3751) に 200 g ai/ha の用量で発芽前土壌処理 (PRE) 又は植付け前土壌混和 (PPI) し、植物体内運命試験が実施された。

植物体 (forage) 及び飼料用の茎葉 (fodder) と穀粒 (grain) における残留放射能濃度は表 3 に示されている。処理方法の違いによって残留濃度に大きな差はなかった。

各試料中に親化合物は検出されなかった。PPI 試験区の穀粒では、代謝物 B 及び C がそれぞれ 0.004 及び 0.035 mg/kg 存在した。代謝物 C はすべての試料で 90%TRR 以上存在したが、B の存在量は植物体及び茎葉で痕跡程度であった。

とうもろこしにおける主要代謝経路は、加水分解によるイソキサゾール環の開裂により B が生成され、さらに加水分解されることで C が生成されると考えられた。この過程はとうもろこしだけではなく、土壌中及び水中加水分解における分解経路でも認められた。(参照 5)

表3 とうもろこし試料中放射能濃度 (mg/kg)

PRE 試験区			PPI 試験区		
植物体	飼料用		植物体	飼料用	
	茎葉	穀粒		茎葉	穀粒
0.23	0.12	0.04	0.20	0.15	0.04

(2) さとうきび

<sup>14</sup>C-イソキサフルトールを、さとうきび (品種不明) に 200 g ai/ha の用量で発芽前土壌処理又は 150 g ai/ha の用量で発芽後茎葉散布し、植付け 1 及び 3 カ月後並びに成熟期に収穫した茎葉を試料として、植物体内運命試験が実施された。

さとうきび試料中の放射能分布及び代謝物は表 4 に示されている。

植付け 1 及び 3 カ月後の試料では、残留放射能濃度は 0.119~0.176 mg/kg であったが、成熟期の放射能濃度はごくわずかであった。分析されたいずれの試料中でも、主要代謝物は C であった。(参照 6)

表 4 さとうきび試料中放射能濃度及び代謝物

試料採取時期		発芽前処理区 (200 g ai/ha)			発芽後処理区 (150 g ai/ha)		
		植付け 1 カ月後	植付け 3 カ月後	成熟期	植付け 1 カ月後	植付け 3 カ月後	成熟期
総抽出放射能 (mg/kg)		0.119	0.147	0.0008	0.176	0.007	0.0004
%TRR	イソキサフルトール	—	—	/	10.8	/	/
	代謝物 C	85.9	93.5	/	66.5	/	/
	代謝物 B	—	—	/	2.2	/	/
	未同定代謝物	9.8	—	/	10.9	/	/
	未抽出残渣	4.3	6.5	/	9.6	/	/

— : 検出されず 斜線 : 分析されず

(3) 小麦

<sup>14</sup>C-イソキサフルトールを、小麦 (品種不明) に 55 又は 105 g ai/ha の用量で発芽後茎葉散布し、散布 41 日後 (青刈り期) に採取した植物体 (hay) 及び 100 日後 (成熟期) に採取したわら (straw) 及び穀粒 (grain) を試料として、植物体内運命試験が実施された。

小麦試料中の放射能分布及び代謝物は表 5 に示されている。

親化合物は、青刈り期にのみ検出された。成熟期には、放射能の大部分は代謝物 C として存在した。(参照 6)

表 5 小麦試料中放射能濃度及び代謝物

試料採取時期	青刈り期		成熟期			
	植物体 (hay)		わら (straw)		穀粒 (grain)	
試料	mg/kg	%TRR	mg/kg	%TRR	mg/kg	%TRR
親化合物	0.011	6.5	—	—	—	—
代謝物 C	0.112	65.0	0.084	79.1	0.055	95.8
代謝物 B	0.036	20.9	0.011	9.9	—	—
未抽出残渣	0.013	7.6	0.012	11.0	0.002	3.5

—：検出されず

### 3. 土壌中運命試験

#### (1) 好氣的土壌中運命試験

<sup>14</sup>C-イソキサフルトールを砂壤土及び埴土に添加し、好氣的土壌中運命試験が実施された。

土壌より抽出された放射能は、試験開始時に砂壤土及び埴土でそれぞれ 108 及び 91%TAR であったが、試験終了時にはそれぞれ 52 及び 30%TAR に減少していた。非抽出性放射能は、試験開始時から終了時まで、砂壤土で 0.9%TAR から 19%TAR、埴土で 4.5%TAR から 28%TAR に増加した。

揮発性物質としては、<sup>14</sup>CO<sub>2</sub> が砂壤土及び埴土でそれぞれ最大 16.8 及び 39.5%TAR 発生した。

主要分解物は B 及び C であり、砂壤土ではそれぞれ最大で 83.0 及び 68.4%TAR、埴土ではそれぞれ最大で 55.1 及び 33.7%TAR に達した。試験終了時には B が 25～30%TAR 存在した。

親化合物、分解物 B 及び C の推定半減期は、表 6 に示されている。(参照 2、7)

表 6 推定半減期 (日)

	イソキサフルトール	分解物 B	分解物 C
砂壤土	1.4	96 (61) *	977
埴土	2.4	24	289

\*：砂壤土における推定半減期は、61 日とする結果も得られた。

#### (2) 好氣的湛水土壌中運命試験

<sup>14</sup>C-イソキサフルトールをを 2 種類の水/底質系 (英国、Manningtree 系及び River Roding 系) に処理し、20±2°C でインキュベートして、好氣的湛水土壌中運命試験が実施された。

水相中の放射能は、添加 14 日後で 50～63%TAR に減少し、添加 100 日後には Manningtree 系で 22%TAR、River Roding 系で 41%TAR に減少していた。土壌中非抽出性放射能は試験開始時の 1～2%TAR から、添加 100 日後の 19～23%TAR

まで増加した。

親化合物は水相中にのみ検出されたが、試験開始7日後からは検出されなくなった。主要分解物はB及びDであった。Bは、それぞれの系で添加2日後に最大値60～63%TARに達し、Dは、Manningtree系では添加2日後に最大値24%TAR、River Roding系では添加7日後に最大値26%TARに達した。それぞれの系で分解物C及びEが検出されたが、いずれも5%TARを超えなかった。

イソキサフルトール、分解物B及びDの推定半減期は表7に示されている。(参照7)

表7 好氣的湛水条件下の推定半減期(日)

		イソキサフルトール	分解物B	分解物D
Manningtree系	水/底質系全体	0.5	703	97
	水相	0.5	66	36
River Roding系	水/底質系全体	0.6	255	52
	水相	0.6	89	36

### (3) 嫌氣的湛水土壤中運命試験

<sup>14</sup>C-イソキサフルトールを水/底質系(採取地不明)に処理し、嫌氣的湛水土壤中運命試験が実施された(温度条件不明)。

水相中の放射能は、速やかに底質相に移動した。底質相中の放射能は添加直後の0%TARから添加1日後には15%TARに増加した。添加28日後には平衡状態に達し、水相中に26%TAR、底質相中に73%TARの放射能が検出された。

親化合物は水相中にのみ検出されたが、試験開始2時間後には検出されなくなった。主要分解物はB及びDであった。Bは、水相中では添加6時間後に最大値69%TARに達した後減少し、添加365日後には23%TARとなった。Bは水相中から減少するのに伴い、底質相中では増加し、添加183日後には57%TARとなった。Dは添加6時間後に最大値28%TAR(水相中及び底質相中にそれぞれ25及び3%TAR)存在したが、その後水相中から底質相に移行し、添加274日後には水相中では1%TAR未満となった。底質相中では添加7日後に最大値10%TARに達した後減少し、添加365日後には3.1%TARであった。それぞれの系で分解物C及びEが検出されたが、1.5%TARを超えなかった。

イソキサフルトール、分解物B及びDの推定半減期は表8に示されている。(参照2、7)



表 8 嫌氣的湛水条件下の推定半減期

	イソキサフルトール	分解物 B	分解物 D
水/底質系全体	<2 時間	算出不能	131 日
水相	<2 時間	316 日	48 日
底質相	検出されず	算出不能	236 日

#### (4) 土壤中光分解試験

<sup>14</sup>C-イソキサフルトールを砂壤土（米国）に添加し、キセノン光（290 nm 以下の波長をカット）を 31 日間照射（光条件：16.1 時間明/7.9 時間暗）して、土壤中光分解試験が実施された。

光照射区及び暗対照区で、推定半減期はそれぞれ 22.8 及び 19.7 時間と大きな差はなく、土壤表面では光照射によって分解速度は影響を受けないと考えられた。

主要分解物は B（70%TAR 以上）及び D（30%TAR 以上）であった。（参照 2、7）

#### (5) 土壤吸脱着試験

4 種類の土壤[砂壤土、砂土、壤土及びシルト質埴土（米国又は英国：内訳の詳細不明）]及び底質土（英国）を用いたイソキサフルトールの土壤吸着試験が実施された。

イソキサフルトールの有機炭素含有率により補正された吸着係数  $K_{oc}$  は 93（壤土）～165（底質土）であった。

4 種類の土壤[埴土、砂土、壤質砂土及びシルト質壤土（米国）]及び底質土（米国）を用いた分解物 B 及び C の土壤吸着試験が実施された。

B の吸着係数  $K_{oc}$  は 94（埴土）～159（壤質砂土）、C の吸着係数  $K_{oc}$  は 23（底質土）～100（シルト質壤土）であった。（参照 7）

#### (6) 土壤溶脱性試験

<sup>14</sup>C-イソキサフルトールを 4 種類の土壤（砂土、埴壤土、シルト質埴土、壤土及び砂壤土）及び底質土（壤土）に添加し、それぞれの土壤における推定半減期（5.5～44.6 時間）までエイジングした後、カラム（36 cm 長）に充填し、溶脱性試験が実施された。

有機物の少ない土壤（3.4%以下）では、溶出液中に 50.5～89.4%TAR の放射能が存在した。親化合物は、カラムの上部 6 cm までのみ存在し、すべての土壤において分解物 B が溶出液中に検出された。C は砂壤土の溶出液中にのみ検出されたが、10%TAR 未満であった。

有機物の多い土壤（シルト質埴土及び底質土）では、それぞれカラム上部より 18 及び 24 cm 付近に、分解物 B 及び C が存在した。また、底質土のカラムでは、D

が少量（1%TAR 未満）存在した。（参照 2、7）

#### 4. 水中運命試験

##### (1) 加水分解試験

イソキサフルトールの pH 5、7 及び 9 の緩衝液（組成及び添加濃度不明）中の推定半減期は、25℃でそれぞれ 11.1 日、20.1 時間及び 3.2 時間と算出された。

イソキサフルトールのイソキサゾール環は加水分解により容易に開裂し、分解物 B が生成されると考えられた。

分解物 B 及び C は pH 7 で加水分解に対し安定であった。（参照 2、7）

##### (2) 水中光分解試験

水中光分解試験が実施され、イソキサフルトールの推定半減期は 40 時間と算出された。また、推定半減期が 6.7 日とする試験結果も得られた。（試験条件の詳細不明）。

イソキサフルトールは暗対照区では安定（添加 54 時間後に 89%TAR 以上が残存）であったため、水中でのイソキサフルトールの分解には光が大きく関与しているものと考えられた。

光照射区では分解産物が数種類確認されたが、いずれも 10%TAR 未満であった。暗対照区では分解物 B、C 及び D が確認され、このうち B が最も多く存在した（5%TAR）。B 及び C は光分解に対し安定であった。（参照 2、7）

#### 5. 土壌残留試験

埴壤土、埴土及び砂壤土（いずれもカナダ）にイソキサフルトールを添加（濃度不明）し、土壌残留試験（圃場）が実施された。

イソキサフルトール、分解物 B 及び C の推定半減期は表 9 に示されている。

また、砂壤土（米国）における土壌残留試験（圃場）が実施され、イソキサフルトール及び分解物 B の推定半減期はそれぞれ 2.2 及び 13.1 日と算出された。

試験土壌に処理されたイソキサフルトールからは、主として分解物 B 及び C が生成された。イソキサフルトールはほとんどの土壌中で、表層から 15 cm までにとどまり、30 cm よりも深く浸透した事例はなかった。（参照 2、7）

表 9 土壌残留試験における推定半減期（日）

	イソキサフルトール	分解物 B	分解物 C
埴壤土	1.5	11.0	11.8
埴土	7.0	26.1	73.0
砂壤土	3.1	11.2	8.9

## 6. 作物残留試験

国内において作物残留試験は実施されていない。

## 7. 後作物残留試験

<sup>14</sup>C-イソキサフルトールを 200 g ai/ha の用量で土壌散布し、散布 34 日後にレタス、ソルガム及びはつかだいこん、123 日後にからしな、はつかいだいこん及び小麦、365 日後にレタス、ソルガム及びはつかいだいこんを植付けた。それぞれ未成熟期及び成熟期に試料を採取した。

最も残留値が高かったのは、散布 34 日後に植付けたソルガムの茎葉であった (0.13 ~ 0.24 mg/kg)。

イソキサフルトールは、散布 34 日後に栽培した作物からのみ検出された。

各試料より、代謝物 B 又は C が検出され、時間経過とともに減少したが、365 日後に植付けた作物のすべてにおいて、代謝物 B 及び C の 0.01 mg/kg を超える残留が観察された。(参照 4、7)

## 8. 一般薬理試験

一般薬理試験については、参照した資料に記載がなかった。

## 9. 急性毒性試験

### (1) 急性毒性試験 (原体)

イソキサフルトールの急性毒性試験が実施された。各試験の結果は表 10 に示されている。(参照 2、4、5、7)

表 10 急性毒性試験結果概要 (原体)

投与経路	動物種	LD <sub>50</sub> (mg/kg 体重)		観察された症状
		雄	雌	
経口	SD ラット 雌雄各 5 匹	>5,000	>5,000	症状及び死亡例なし
経皮	NZW ウサギ 雌雄各 5 匹	>2,000	>2,000	症状及び死亡例なし
吸入	SD ラット 雌雄各 5 匹	LC <sub>50</sub> (mg/L)		症状及び死亡例なし
		>5.23	>5.23	

## (2) 急性毒性試験（代謝物）

イソキサフルトールの代謝物の急性経口毒性試験が実施された。各試験の結果は表 11 に示されている。（参照 4、5）

表 11 急性毒性試験結果概要（原体）

検体	動物種	LD <sub>50</sub> (mg/kg 体重)		観察された症状
		雄	雌	
代謝物 B	SD ラット 雌雄各 5 匹	>5,000	>5,000	眼瞼下垂、自発運動低下、立毛、皮膚の冷感、振戦、呼吸困難、緩徐呼吸 5,000 mg/kg 体重投与群で雌雄とも死亡例
代謝物 C	SD ラット 雌雄各 5 匹	>5,000	>5,000	呼吸困難、立毛、粘液便、被毛湿潤、流涎、異常呼吸音、円背位、自発運動低下 死亡例なし

## (3) 急性神経毒性試験（ラット）

SD ラット（一群雌雄各 10 匹）を用いた強制経口（原体：0、125、500 及び 2,000 mg/kg 体重、溶媒：0.5%MC 水溶液）投与による急性神経毒性試験が実施された。

死亡例はなく、自発運動量、FOB を含めた各検査において、検体投与の影響は認められなかった。試験 15 日に、500 mg/kg 体重以上投与群の雄で後肢開脚幅の減少が認められたが、他の時期には認められなかったこと、後肢機能に関する他の試験では投与の影響が認められなかったこと等から、検体投与の影響ではないと考えられた。

本試験における無毒性量は、雌雄とも本試験の最高用量 2,000 mg/kg 体重であると考えられた。神経毒性は認められなかった。（参照 5、7）

## 10. 眼・皮膚に対する刺激性及び皮膚感作性試験

NZW ウサギを用いた眼刺激性試験及び皮膚刺激性試験が実施された。その結果、眼に対し軽微な刺激性が認められたが、皮膚に対しては刺激性は認められなかった。

Hartley モルモットを用いた皮膚感作性試験（Buehler 変法及び Maximization 法）が実施された。その結果、皮膚感作性は認められなかった。（参照 5、7）

## 1.1. 亜急性毒性試験

### (1) 90日間亜急性毒性試験（ラット）

SD ラット（一群雌雄各 10 匹）を用いた混餌（原体：0、1、3、10 及び 100 mg/kg 体重/日）投与による 90 日間亜急性毒性試験が実施された。

100 mg/kg 体重/日投与群の雌 1 例、10 mg/kg 体重/日投与群の雄 1 例及び 1 mg/kg 体重/日投与群の雌雄各 1 例ずつが採血時に死亡したが、肉眼的に顕著な異常は認められなかった。

各投与群で認められた毒性所見は表 12 に示されている。

臨床症状として、100 及び 1 mg/kg 体重/日投与群の雌及び 10 mg/kg 体重/日以上投与群の雄で眼の混濁が認められた。しかし、1 mg/kg 体重/日投与群では病理組織学的変化が認められなかったことから、10 mg/kg 体重/日以上投与群における変化のみが、検体投与の影響によるものと考えられた。

本試験において、10 mg/kg 体重/日以上投与群の雄及び 100 mg/kg 体重/日投与群の雌で角膜混濁、Lym 減少等が認められたので、無毒性量は雄で 3 mg/kg 体重/日、雌で 10 mg/kg 体重/日であると考えられた。（参照 5、7）

表 12 90日間亜急性毒性試験（ラット）で認められた毒性所見

投与群	雄	雌
100 mg/kg 体重/日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ PLT 減少</li> <li>・ TP 増加、クロール減少</li> <li>・ 尿 pH 低下、尿比重増加</li> <li>・ 肝及び腎絶対及び比重量<sup>1</sup>増加</li> <li>・ 角膜角化</li> <li>・ 角膜上皮表層剥離、肥厚化、炎症</li> <li>・ 角膜上皮下線維芽細胞活性化</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ Lym 減少、PT 延長</li> <li>・ Chol 増加、クロール減少</li> <li>・ 尿 pH 低下</li> <li>・ 肝絶対及び比重量増加</li> <li>・ 眼の不透明化、角膜混濁</li> <li>・ 虹彩炎</li> <li>・ 角膜角化</li> <li>・ 角膜上皮表層剥離、空胞化、炎症</li> <li>・ 角膜上皮下線維芽細胞活性化</li> <li>・ 角膜実質血管新生</li> </ul>
10 mg/kg 体重/日以上	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ Lym 減少</li> <li>・ 眼の不透明化、角膜混濁</li> <li>・ 小葉中心性肝細胞肥大</li> <li>・ 角膜上皮空胞化</li> <li>・ 虹彩炎</li> <li>・ 角膜実質血管新生</li> </ul>	10 mg/kg 体重/日以下 毒性所見なし
3 mg/kg 体重/日以下	毒性所見なし	

<sup>1</sup> 体重比重量を比重量という（以下同じ）。

## (2) 90日間亜急性毒性試験 (マウス)

ICR マウス (一群雌雄各 12 匹) を用いた混餌 (原体:0、50、1,000 及び 2,000 ppm) 投与による 90 日間亜急性毒性試験が実施された。

各投与群で認められた毒性所見は表 13 に示されている。

本試験において、1,000 ppm 以上投与群の雌雄で小葉中心性肝細胞肥大等が認められたので、無毒性量は雌雄とも 50 ppm (雄:7.6 mg/kg 体重/日、雌:8.7 mg/kg 体重/日) であると考えられた。(参照 5、7)

表 13 90 日間亜急性毒性試験 (マウス) で認められた毒性所見

投与群	雄	雌
2,000 ppm	<ul style="list-style-type: none"><li>・腹部表面汚染 (黄色化)</li><li>・ALT、AST 増加</li><li>・肝腫大及び退色</li><li>・小葉中心性肝細胞脂肪化</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・ALT、AST 増加</li><li>・肝絶対及び比重量増加</li></ul>
1,000 ppm 以上	<ul style="list-style-type: none"><li>・肝絶対及び比重量増加</li><li>・小葉中心性肝細胞肥大</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・小葉中心性肝細胞肥大</li></ul>
50 ppm	毒性所見なし	毒性所見なし

## (3) 90日間亜急性神経毒性試験 (ラット)

SD ラット (一群雌雄各 10 匹) を用いた混餌 (原体:0、25、250 及び 750 mg/kg 体重/日) 投与による 90 日間亜急性神経毒性試験が実施された。

750 mg/kg 体重/日投与群の雄で体重増加抑制が認められた。

自発運動量、FOB 及び神経組織病理学的検査において、検体投与の影響は認められなかった。

本試験における無毒性量は、雄で 250 mg/kg 体重/日、雌で本試験の最高用量 750 mg/kg 体重/日であると考えられた。神経毒性は認められなかった。(参照 5、7)

## (4) 42日間亜急性毒性試験 (ラット)

SD ラット (一群雌雄各 10 匹) を用いた混餌 (原体:0、25、100、400 及び 1,000 mg/kg 体重/日) 投与による亜急性毒性試験が実施された。各投与群とも、42 日間検体を混餌投与後、49 日間回復期間を設けた。

各投与群で認められた毒性所見は表 14 に示されている。

眼科学的検査によって認められた角膜限局性混濁は、試験 3 週目より確認され、雌より雄で顕著であったが、用量相関性は認められなかった。この変化は、回復期間中速やかに回復し、回復 2 週間時には雌雄とも消失した。

回復期間終了時に実施された組織病理学的検査においては、100 mg/kg 体重/日以上投与群の雌雄で角膜の変化が観察された。

肝重量に検体投与の影響は認められなかったが、臓器重量は回復期間終了時に測定したため、投与期間中の変化が回復した可能性も考えられた。

本試験において、25 mg/kg 体重/日以上投与群の雄及び100 mg/kg 体重/日以上投与群の雌で角膜限局性混濁等が認められたので、無毒性量は雄で25 mg/kg 体重/日未満、雌で25 mg/kg 体重/日であると考えられた。(参照5、7)

表 14 42 日間亜急性毒性試験 (ラット) で認められた毒性所見

投与群	雄	雌
1,000 mg/kg 体重/日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体重増加抑制</li> <li>・WBC 減少、PT 延長</li> <li>・クロール減少</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・摂餌量減少</li> <li>・Ht、MCV、MCH、WBC 減少</li> <li>・TP 増加、</li> </ul>
400 mg/kg 体重/日以上	<ul style="list-style-type: none"> <li>・食餌効率減少</li> <li>・Hb 減少</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体重増加抑制、食餌効率減少</li> <li>・Glu、A/G 比、クロール減少</li> </ul>
100 mg/kg 体重/日以上	<ul style="list-style-type: none"> <li>・尿 pH 低下</li> <li>・角膜上皮肥厚</li> <li>・角膜上皮下の間質線維芽細胞反応</li> <li>・角膜実質血管新生</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・角膜限局性混濁 (片側性、両側性)</li> <li>・角膜上皮肥厚</li> <li>・角膜上皮下の間質線維芽細胞反応</li> <li>・角膜実質血管新生</li> </ul>
25 mg/kg 体重/日以上	<ul style="list-style-type: none"> <li>・Glu 減少</li> <li>・角膜限局性混濁 (片側性、両側性)</li> </ul>	25 mg/kg 体重/日 毒性所見なし

(5) 28 日間亜急性毒性試験 (マウス)

ICR マウス (一群雌雄各 10 匹) を用いた混餌 (原体 : 0、175、700、2,800 及び 7,000 ppm) 投与による 28 日間亜急性毒性試験が実施された。

各投与群で認められた毒性所見は表 15 に示されている。

本試験において、175 ppm 以上投与群の雄で肝絶対重量増加、700 ppm 以上投与群の雌で小葉中心性肝細胞肥大等が認められたので、無毒性量は雄で 175 ppm 未満 (29 mg/kg 体重/日未満)、雌で 175 ppm (35 mg/kg 体重/日) であると考えられた。(参照 5)

表 15 28 日間亜急性毒性試験 (マウス) で認められた毒性所見

投与群	雄	雌
7,000 ppm	・脾髄外造血	・脾髄外造血
2,800 ppm 以上	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ALT、AST 増加</li> <li>・肝白色域、小葉明瞭化</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・肝腫大</li> <li>・肝白色域、小葉明瞭化</li> </ul>
700 ppm 以上	<ul style="list-style-type: none"> <li>・肝比重量増加</li> <li>・肝腫大</li> <li>・小葉中心性肝細胞肥大</li> <li>・肝壊死巣</li> <li>・肝炎症性細胞浸潤</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ALT 増加</li> <li>・肝絶対及び比重量増加</li> <li>・小葉中心性肝細胞肥大</li> <li>・肝壊死巣</li> <li>・肝炎症性細胞浸潤</li> </ul>
175 ppm 以上	・肝絶対重量増加	175 ppm 毒性所見なし